

クウェートに留学して

武田朝子

クウェート政府奨学生として、一九八九年二月から一九九〇年四月までクウェート大学に留学しました。アラブ人やアジア、アフリカのムスリムの女子学生約三〇〇人の住む学生寮で生活し、大学では週五日、一日約四時間のアラビア語のコースで、文法、コーラン、イスラーム、文学、新聞や雑誌講読の勉強をし、午後はたいいてい昼寝の後、宿題や予習、試験勉強のノルマにおわれながらも、人に会ったり、外出して社会見学していました。

実は留学を決めた当時、アラブの現代社会研究という他に、明確な研究テーマが定まっていませんでした。決めたのでただ現地に行っても無意味とも思えるし、本を読んでも実際にいってみなければ自分の関心などしほりこめないような感じもし、迷って大学院の先生方や友達に相談しましたが、留学のチャンスはいつでもあるわけではないし、

語学を早く修得しておくほうがいいこと、一年たった頃テーマが絞ればいいのでは、というアドバイスをいただき、出発することに決めました。また秘かに、石油収入で何もかも近代的に造られた国に自分の関心や感性にひっかかるものがあるのだろうかという不安と、いや、人間の住んでいる所で面白くないところはないはずだ、との気持ちもあわせもってでかけたのです。

クウェートは産油国で物質的には大変恵まれ、衛生、治安状態もよく、生活面の苦勞はありませんでした。悩みは、クウェートに暮らしても案外クウェート人の生活を見る機会がないことでした。クウェートはいながらにして世界中の人々に会うことができ、国々の事情をかいまみることができます。これはクウェート人口約二〇〇万のうち自国人が四〇％以下で、労働力の多くを外国人にたよっている国家のありかたが原因なのですが、例えば私の日常生活では、アラビア語の先生達はエジプト人、パレスチナ人、スーダン人、寮でもクウェート人は寮長クラスだけで、スーダン人、スーダン人はエジプト人、毎日部屋を掃除してくれるおばさん達や、寮と大学や町、スーパーに寮生の送り迎えをする運転手さん達、食堂のコックさん達はエジプト、エリトリア、スーダン、インドの人々、さらに寮の掃除に会社から派遣されてくる女性労働者はフィリピン人でした。街に

出ても、お店で働いている姿がみえるのは皆外国人です。世界の多くは、貧困や政治紛争で日常生活が常に脅威にさらされ、家族と暮らすこともできずにいるのだということ、日本社会で自分に選択肢がいろいろある状況の貴重さを、日本で頭で理解しているときよりリアルに実感させられたのはよかったと思います。しかし、特殊な条件をいろいろ抱えながらも、人間としてクウェート人の文化、生活、創造、悩みが確かに存在するのだということを確かめようと勢い込んでゐるのに、それらの外国人労働者からやつかみ半分のクウェート人の悪口をきくばかりで、当のクウェート人に会うことが少なくていらいました。

ただ、一学期は語学力がなく、女性の行動の自由があまりない国で、自由に外を歩いて人間関係を広げることも難しく、なんとなく自分の殻に閉じこもりがちで調子でない苦しさがありました。またそのような社会に育っている女子大生達は、外国人や見知らぬ人、異文化にたいする興味や働きかけが私たちからすると一般に消極的で、とくにはじめはつきあいにくい面があったとも思います。いま思えば、それだけではなく、アラブに限らず各国の人々の旺盛な自己表現——会話でも踊りでも——にに対し気後れしていたふしもあるようです。

さて、一学期が終わり、六月から九月まで四カ月の夏休

み。クウェートは気温四〇—五〇度になり自家用車もない私たちは寮に残ってじっとしていてもしかたないと、アラブ各国を旅することになりました。陸路、クウェート、イラク、ヨルダン、シリア、エジプトをまわり、よい友人がいたことからどの国、町、農村でもその土地のアラブの人々のお世話になり、地域の歴史、政治、人々の暮らしを学んだり、また逆に日本のことを聞かれました。内戦で無政府状態になり、しかし人々が実に独立自由に自力でいきている国、圧制下で自由にものがいえない状況を肌でかんじさせられた国、国をもたない人々、国といっている、ぐるりと国土を回ってみると、地理も民族も宗教もちがいとでもひとつの単位として感じがたい国など、中東各国を回ると、まるで、社会の実験場のようです。いくつかの国を訪ねるとそれぞれの違いや日本との違いがとても対照的によくわかるのです。毎日、自分の言いたいことが思うようにいえず、相手の話も充分理解できず、苦しい思いをしました。これは、語学のうえでも、アラブ社会を知る上でも、大変素晴らしい機会だったと思います。旅をおえてクウェートにもどった時には、寮のアラブ人学生から、あなたなんだか前よりパワフルになったわね、などと言われ、いつの間にか、考えるよりまえに大きな声で冗談が言いかえせるようになってるのに気がきました。

クウェートに留学して(武田)

二期期のクラスでは語学そのものの訓練もさることながら宗教や世界情勢、アラブ世界の文化の問題に関する学習、討論がふえました。私のクラスの先生はムスリム同胞団のメンバーで、イスラム原理にのっとった社会の実現を目指していましたが、社会の変化と原理の問題、異教徒に対する考え方などでクラスのムスリム、非ムスリム共々意見の分かれることがありました。他の事ではユーモアも表現力もあり、人間に対する限らない興味もある人物でしたが、外国人にアラビア語を教えながらも、ムスリム、他の一神教徒、そのほかの人間に厳然たる境を設けていることは、私にとっては非常にどうとらえていいかわかりませんでした。大学生にも熱心な信仰者がたくさんいましたが、とにかくその人にとってよくいえば深い信念、悪くいえば盲信するだけの絶対者、神、社会や文化があり、異教徒や異なる文化、価値観を目の前にしてまったく自分の考えをゆさぶられることない人々にであったのははじめてでしたから、これは相当びっくりしました。いくら、好意的に相対的に相手を理解しようとしても、相手にとっては、異教徒が改宗かどちらか、という感じで、何事も勉強、簡単に相手を判断したり拒絶することは禁物と思っても、時にはやりきれないようなもやがたまってきます。そんな時は部屋のドアに鍵をかけて、中国人留学生がこっそり国から

持ち込んだ豚肉の缶詰を開けてうつぶんを晴らしました。(宗教上の理由からクウェートでは豚肉は禁止)。ひとくにイスラームといっても、各国、各地域、宗派、家族、個人によって実践されている宗教の寛容度、考え方は実に多様で、イスラームが社会の発展、個人の成熟、創造的精神を妨げている、と批判あるいは否定するアラブ人もいます。イスラームの問題はぶつぶつと変化にむけて煮えたぎっているような今の中東社会にとって、社会、文化、政治、生命のすべてに関わる重要問題であることはまちがいないと思いました。

二期期からは、もっと積極的にクウェート人に会おうと人に紹介を頼んだり、もし「クウェートはどうですか?」ときかれたら、絶対お世辞をいわずに、「もう四カ月住んでとてもクウェート人の生活を知りたいのに、いままで家庭に招いてくれたのは外国人ばかりで、これではとても、クウェートの印象は言えません」と答えたりして、その甲斐あって段々家庭や職場にクウェート人をたずねるチャンスが増えてきました。公の場では知ることのできない社会問題や人々の実感、考え方を知らなくて、英語のディスカッションクラスにいられてもらったりもしました。そこでは学生が日常的関心からテーマを選んで調査、スピーチしますが、急速な社会変化の中で、家族関係、女性の生き方、

お金のことなどに、様々な問題があることがわかりました。現代アラブの問題を討論するクラスに参加したことで夏の旅行でみたアラブ世界の印象がよりきちんと理解されてもきました。もちろん友達も増えました。毎週休日の金曜日に訪ねておひるをごちそうになったり親戚同士の行き来にも家族同様まじわらせてくれるパレスチナ人の家族もできました。

こうして歩き回っているうちに、急激な石油収入の流入による社会変化で、伝統やら新しいものやらが混在しあちこちで葛藤や混乱の起きている社会状況に興味をもち、又、断片的に集まってきた情報や印象をまとまった形で深めたいと思うようになり、自分でできとりをしながら小さな調査をすることにしました。テーマは、女性と変化の問題にしました。

寮や大学でききとりをし、夜はそれについて、寮のアラブ人の友達に説明を頼んだり、あるいは外国人どうし討論したり、さらに大学の先生達も友達として手伝ってくれました。欧米に移住したアラブ人やアジア人、クウェート人、インド系南アフリカ人のムスリムの女性など、教育をうけた社会も国も宗教も、したがって現在の価値観もことなるけれど問題意識の鋭い人々とひとつの社会をみながら学んだことは、クウェートの理解のみならず、それぞれの友達

の社会について知ること、自分や自分の社会について、社会科学の調査方法や問題についての疑問や理解を深めることにともなり、本当に毎日刺激的でしたが、今回の湾岸危機でいまはそれらの人々の誰とも連絡がとれません。皆どこかの国で無事にしていて、いつか連絡がまたとれるようになるば、と本当におもいます。

帰国後、留学中に行ったきとりを材料の一部にしながらクウェートについて修士論文を書いています。クウェートではある意味で非常にすっきりした頭で調査していたのに比べると、精神的につらい作業です。現地調査は毎日動いて、新しい人との出会いや発見の連続で成り立つようなところがありました。帰国すると、その社会や調査と同時進行だった自分の人間関係や生活スタイルからばっさり切り放されて、作業はとたんに孤独なものになります。論文という学問的なスタイルに向けてあらためてクウェート理解を深めるのはおもしろいことではありますが、私には難しくて辟易することも少なくありません。またそのクウェート理解の作業をすすめながら、今度は同時に自分の社会、自分の社会での自分のありかた、に直面させられています。外へ向かっていた自分の目が、今度はぐっと自身にせまってくるのです。異文化社会の研究とは、他を通して自己をも理解することだ、とはよくいわれることで、

本当にそのとおりですが、自分を常にとらえなおす、より深く、冷静に現実的に正直にとらえるとは、実際おおよそかっこいいことではなく、今の私には避けがたく迫ってくるなんともいえないしんどさという感じです。

現在のアラブは困難な政治、経済問題を抱えており、また歴史的に、異なる民族、宗教、政治的立場、経済状態をもつ人々の混在する社会の中です。人々は、年寄りでも、女でも若者でも、社会の中でどんな立場をとるのかを、常に選択し、せざるを得ず、選択しなかった立場の人々を敵に回します。戦争状態になればこれは即命の問題になります。ナイーブさを捨てて現実的にならざるを得ない状況です。このような社会での人間関係、コミュニケーションや自己表現のしかたは、非常に鋭い政治・社会感覚のうえに成り立った、積極的で、表現力が豊かな、ダイナミックな

ものがあります。豊かなクウェート社会では、富で欲しいもの、したい事がひととおり可能になり、では人々は幸福だろうか、なにをするのか、という課題に突然直面することになったようにみえました。また豊かな社会でも困難な社会でも、伝統的な社会慣習と自分の自由への切実な希求のはざままで呻吟している人々がたくさんいました。アラブにくらべて日本がなぜ政治、経済、様々な面で成功しているのか、よく働くことが理由なら、何故働くのか、と大学でも旅先でもきかれた質問のことはずっと気になっていました。類似点、共通点からも、相違点からも考える出発点はいくらでもあるようです。アラブと日本の間で往復運動を繰り返しながら、自分のいきかたがより強くなっていくよう願っています。（一九九〇・一一・一〇）

（一九九〇年度立教大学地理学専攻博士課程前期課程修了）